

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2692600212		
法人名	社会福祉法人 五十鈴会		
事業所名	グループホーム風花		
所在地	京都府福知山市字行積141番地		
自己評価作成日	令和 6年10月20日	評価結果市町村受理日	令和7年1月21日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/26/index.php?action_kouhyou_detail_Q22_kani=true&JigvosoCd=2692600212-00&ServiceCd=320&Type=search
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	一般社団法人 京都ボランティア協会
所在地	〒600-8127京都市下京区西木屋町通上ノ口上る梅湊町83-1「ひと・まち交流館 京都」1階
訪問調査日	令和6年11月19日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

当施設は山間部に位置し、自然豊かな環境の中にあります。居室からの景色も良く、敷地内にある桜、周辺の田や山々の四季折々の風景を楽しむことができます。その様な環境の中、ご利用者は、畑仕事や草むしりなど、自然に親しみながら生活をしています。また、ご利用者の多くが田畑をされてきた方であり、敷地内の畑で季節の野菜作りや収穫、その他地元住民の方からいただいた新鮮な野菜を自らで料理し召し上がっています。それらの仕事では、ご利用者自身が持つておられる能力、出来る事・得意なこと等を生かしています。コロナ禍でしたが感染予防に努めながら、可能な範囲でご利用者の希望される場所やドライブに行く等、また、バーベキューや併設の特養とのイベント行事などを実施し、単調になりがちな日常生活を楽しく、少しでも刺激を持っていたけよう取り組んでいます。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

「高齢者生活支援施設きらら」の一角の当ホームでは、利用者の判断と行動を重んじ、何でも利用者に聞いてから一緒におこなっています。また、地域との支え合いも良好で、米、野菜、果物、巾着、花などの寄贈のほか、冬場は地域から除雪車を有償で貸出してもらっています。ガラス拭きや屋外の草引き、花壇の手入れなどにも地域の方の協力があります。また、手作り食にこだわる当事業所にとって、食材の寄贈は非常に有難く、浮いたコストで昨今貴重な葡萄、みかん、キューイなどの生のデザートを提供されています。さらに行事も充実し、併設の地域密着型特別養護老人ホームと合同で、花見や運動会、焼き芋、餅つき大会、田植え、稲刈り、その藁を使ったしめ縄作りなど、利用者の活躍の場は多岐にわたります。在宅時に無表情だった方が入所後表情豊かになり、家族が驚かれた例もあります。そうした日々の様子は機関紙きらら通信の紙面をいきいきと飾り、地域の240戸に配布されています。一方、入居前からの主治医や法人の理事長の定期訪問診療や臨時の往診、さらに併設事業所との医療連携により看護師の週1回の訪問及び緊急時対応があり、利用者は医療面でも安心です。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓該当するものに○印		項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と
			2. 利用者の2/3くらいの				2. 家族の2/3くらいと
			3. 利用者の1/3くらいの				3. 家族の1/3くらいと
			4. ほとんど掴んでいない				4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように
			2. 数日に1回程度ある				2. 数日に1回程度
			3. たまにある				3. たまに
			4. ほとんどない				4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 少しずつ増えている
			3. 利用者の1/3くらいが				3. あまり増えていない
			4. ほとんどいない				4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 職員の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 職員の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 家族等の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 家族等の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が				
			2. 利用者の2/3くらいが				
			3. 利用者の1/3くらいが				
			4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価		
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
I. 理念に基づく運営						
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	法人理念を事業所内に掲示すると共に、施設内研修時には理念の確認を行っている。また、職員は理念実現のための、ユニット目標、個人目標を作成するとともに事業計画にも参画し、理念実現のため取り組んでいる。	個人の尊厳保持などを謳った法人理念は季刊紙「きらら通信」やホームページに掲載されている。事業所理念「施設入所が終わりではなく『希望の持てる生活』を目指します。」他1項目は重要事項説明書に明記し、玄関や事業所内にも掲示している。理念の周知徹底のため、職員研修資料の冒頭に理念を書く欄を設けている。		
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナウイルス感染予防のためボランティア等の受け入れはしていないが、地域住民のボランティアグループによる草取りや窓掃除などの協力を得ている。また、ご近所の方からの野菜の差し入れがあったりと交流が図れている。きらら通信を地域に全戸配布することで、入居中の知り合いの方などの施設の様子が分かると好評をいただいている。	町内会に入っているが、町内の役割は担っていない。地域のお寺の研修に招かれ認知症の話をしている。北陵コミュニティセンターの公民館祭りにポスターやちぎり絵など利用者作品を出品している。地域から米や野菜の寄贈がある。民生児童委員協議会から花の鉢を頂いている。保育園から運動会用の綱引きの縄を借りている。		
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	運営推進会議に参加している民生児童委員や地域から働きに来ている職員を通して、地域での問題や課題等を拾い上げ、相談があればいつでも対応できる状態であることをお伝えしている。			
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	今年度は2か月に1度の会議が中止になることなく開催され、各事業所の報告、委員との意見交換が行われている。また、今年度からは施設の取り組みなど具体的に資料を活用し説明もしている。委員の中には特養とグループホームの家族が参加されており、その際にも意見や要望を聞きとり、サービスの向上に努めている。	会議には自治会長や複数の地区の民生児童委員、知見者、利用者家族などが参加されている。普段の生活を動画で見てもらい好評である。事故報告や今後のイベントなどの報告もあり、参加された方には必ず一言いただくようにしている。運営推進会議議事録は出欠を問わず、委員や職員、行政及び全家族に配布している。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議には市の担当者や包括支援センター担当者の参加があり、施設の状況やサービスの質の向上への取り組みを伝えている。会議では各担当者と情報共有や意見交換を通して良好な関係が保たれている。	外国人介護人材定着支援金について、行政と福知山市民間社会福祉施設連絡協議会の加盟施設長と話す機会がある。事故報告書や運営推進会議議事録を提出している。運営推進会議に市の担当者の出席がある。介護サービス相談員からの手紙に利用者が返事を書いている。管理者が市の地域福祉推進委員会に出席している。市役所の新規採用職員の介護現場での研修を受け入れている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束廃止の勉強会を年に2回開催し、その研修では事例検討も行い、利用者の尊厳の保持を目指した支援に向けて取り組んでいる。玄関の施錠については、基本しない方向で実施している。	指針を整備し、4事業所合同で高齢者虐待防止・身体拘束廃止委員会を開催している。年2回の全職員研修では、事前に職員が問題提起をした中から事例検討のテーマを選んでいる。夜勤者はZOOM研修の報告書を提出している。玄関は施錠せず、閉じ込めない介護をしている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	身体拘束廃止の勉強会や職員会議において高齢者虐待についての学びを深めている。研修ではグループワークを通して職員同士で問題や課題の抽出、検討を行うなど現場に即した課題解決に向け取り組んでいる。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	現在、利用者で成年後見人制度を活用していることもあり、職員は制度への理解はある。また、様々な制度についてはパンフレットやユニット会議を通して、学ぶ機会を設けている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約書重要事項説明書に基づき説明を行っている。契約時等は一つ一つ丁寧に説明し不安の解消に努め、納得のいった上で署名してもらっている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	電話や面会時、また、2ヶ月に一度の運営推進会議、利用者アンケート(年1回)、苦情箱等において回収された意見や要望は戦略会議等で検討され、ユニット会議、連絡ノートなど活用し、周知している。苦情やアンケート結果については、きらら通信により家族に発信している。	毎年のアンケート結果は広報紙に掲載している。利用者の意見は普段から丁寧に聞き取り、家族の「何を食べているのか知りたい」などの意見には、食事内容をカラー写真で送り改善している。現在も面会には慎重で、本人の居室ではなく別室で実施している。個人的な意見には、訪問や、文書の郵送などでも対応している。	法人の方針もおありでしょうが、早く利用者と家族が居室での面会を再開できるよう期待します。

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	戦略会議やユニット会議等他、施設長が直接声をかけ、職員の意見や提案を聞く機会を設けている。法人本部による職員面談等も実施され、それらの意見を集約し、運営に反映している。	普段からリーダーや施設長が職員の意見を聞いている。会議の前には「グループホームユニット会議事前協議事項について」の用紙に全員が課題を書き、会議の検討内容を決めている。研修等に参加できないが、ぜひ出席してほしい職員にはZOOM視聴で研修をしてもらっている。希望休は毎月3日とれる。意向を汲んでもらい働きやすいとの職員意見が聞けた。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	管理者は現場に足を運び、日々の職員の勤務状態を知るとともに、ユニット会議への参加、職員からの相談にその都度対応しながら、職員の意見を集約し、働きやすい環境整備に努めている。相談以外にも個別面談とは言えないが、随時声をかけ状況の把握に努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	研修の一覧表を作成し、また職員の研修参加の有無を把握し管理している。施設内研修はまだまだ充実していないが、各委員会での研修やミニ研修会、介護情報などを配布、または回覧し、介護の質の向上に努めている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	管理者や職員は福知山民間社会福祉施設連絡協議会や研修会など他施設との交流を図っている。その様な機会を通して意見交換や情報収集を行いながら、自施設のサービスの質の向上に努めている。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	施設見学時や初回面談日(訪問)には、本人とゆっくりと話をしながら、利用者理解を深め、現在の困りごとや不安などを聞き取っている。また、今後の生活についてその都度、利用者の情動に配慮し、敬愛の念を持って対応している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	施設見学や初回面談日(訪問)に家族から時間をかけて希望・要望、悩み事を聞き取りながら、施設での今後について展望が持てるように説明し、安心感を持てるように対応することで、信頼関係の構築に努めている。		

京都府 グループホーム風花

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	ケアマネジャーや他事業所と情報交換をしながら、本人と家族等が納得がいくようなサービスが受けられるよう支援している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	利用者は調理や洗濯物たたみ、草取りなどの家事や軽作業を自分のできる範囲内で積極的に取り組んでいる。利用者は役割意識を持ち、社会の一員として職員と共に暮らしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	コロナウイルス感染が発生した場合のリスクを鑑み、当法人では面会制限をまだ設けている。面会は電話予約、面会時間(15分)は状況により延長もしている。日頃の様子は手紙や電話でお伝えし、その時々に必要な支援について家族と一緒に考えている。例えば、本人に必要な物や家族の写真を持参していただく。また、状況によっては家族からの手紙や電話などでの声かけなど、職員ではできない関わりの支援をお願いしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナウイルス感染症が5類に移行されたが、面会制限継続中であるが柔軟に対応している。現在はアクリル板を通しての面会、電話またはリモート面会を通じて関係性が途切れないようにしている。コロナウイルス感染状況を見ながら自宅で過ごしていただく機会を作ったり、家族に自宅で過ごす事や家族との買い物の提案をしたりしている。	家族や、京都市内の友人の面会がある。事業所として個人の買い物外出は殆どできていないが、家族との外出や外泊は情勢を見ながらではあるが可能である。携帯電話使用の手助け、電話の取次ぎもしている。ちぎり絵の得意な方は家族に手製のはがきを送っている。歌、昼夕のパタカラ体操、洗濯物畳みやモップかけ、調理、職員が持ってきた花を活けるなど、皆何かをされている。園芸の好きな方は農園の畑仕事や、職員の畑の芋ほりに行っている。大きなプランターで稲を育て、米を収穫し、その藁で正月のしめ縄を作っている。鍼灸師の依頼ができ、ホールにチラシを貼っている。各担当が家族に近況を送っている。さらら通信にQRコードを設定し、情報を得やすくしている。利用者の絵、編み物、ちぎり絵の作品は北陵コミセン祭りに出品している。また、利用者の絵は額に入れて事業所の廊下に飾っている。	

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	常に職員間で情報を共有し、利用者一人ひとりの特性を理解するとともに、食堂の席順などの工夫や自然と集まり会話ができるような環境作りをしている。利用者同士が仕事や、レクリエーションなどの共同作業を通して関係性の構築に努めている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービスが終了後であっても、家族からの電話での問い合わせや相談があった場合は対応している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	入居前の面談や入居時等、利用者との会話や関わりの中から、意向や思いを聴きとると共に、利用者の身体状況や今の様子から推察されるニーズを明確にし、本人や家族の意向に沿えるよう努めている。	「何をしましょうか?」「何が食べたいですか?」と利用者に聞き、レクリエーションや献立を決めている。編み物の好きな方は職員と出かけて好きな毛糸を選び、ユニットの買い物同行を買って出た方には支払いを経験してもらっている。誕生日は本人の好物で祝っている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前の面談、面会時や、サービス担当者会議、利用者や家族、前任のケアマネジャー等から情報収集を行うことで利用者像の把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々のケース記録(パソコン)、ケース用紙にて毎日のモニタリング 食事摂取量 排泄表等に記載している。また、その月の様子を担当が評価記録している。それらを、職員間で情報共有することで、利用者の現状を把握し、小さな変化も見逃さないように努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ユニット会議にてカンファレンスを行い、ケアプランにつなげている。また、情報収集用のシート(必要と思われる支援内容)にてユニット職員全員、特養の看護師からも意見をもらい、介護計画書に反映させている。状況に応じ理学療法士や管理栄養士にも相談し、意見をもらっている。できる範囲で家族に来訪頂き、本人の状況、援助内容について話す機会を作っている。	アセスメント用紙は介護計画とともに概ね1年で更新し、その間の変化は日付け入りで赤ペンで追記している。併設事業所のスタッフも含め、多職種のコメントから「必要と思われる支援内容」を導き出し、介護計画作成前にも家族から同意書もらい、本プランを作成している。介護計画の長期目標を1年、短期目標を6ヶ月とするが、変化に応じて随時計画を変更している。各担当が毎月モニタリングした結果を介護支援専門員が2ヶ月ごとに評価表に記入している。	

京都府 グループホーム風花

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	ケース記録(パソコン) やケース用紙に毎日記入し、職員間で共有している。ケース用紙にはケアプラン(支援の方針)やケアの実施のチェック、レクの内容や様子を記入し、情報共有や評価に繋げている。また、利用者の支援の変更事項等は連絡ノートに記載し、情報共有に努めている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	誕生日や行事等には、季節の物や利用者の食べたい物の希望を聞き提供している。また、コロナウイルス感染状況を考慮しながら、工夫を凝らし個々のニーズに対応している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域資源が活用できるよう、様々な情報は収集しているが、地域の公民館行事や地域のイベントへなかなか参加できない状況がある。毎年秋には芋ほりに出かけ地域の方々と交流が図れた。地域情報を施設内の掲示板に掲載している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居前のかかりつけ医を基本継続とし、受診、または訪問診療にて対応している。訪問診療の方は訪問診療時職員も同席している。受診の方は基本家族対応となっているが、受診時には家族に近況をお伝えしたり、必要に応じ、現在の状況や医師に伝えたい事柄を書いた用紙を家族に渡したり、職員が受診に同行したりしている。	8名が入所前からの主治医(2医療機関)の訪問診療を月2回受けている。1名は家族とかかりつけ医を受診される。眼科等には職員が同行している。訪問歯科の利用者もおられる。歯科衛生士の資格を持つ職員が主となり口腔ケアをおこなっている。併設の特別養護老人ホームの看護師が週1回訪問する他、必要時の協力体制が整っている。鍼灸師の紹介もしている。夜間は基本的に管理者がオンコールに対応し、必要時には併設の特別養護老人ホームの看護師と連携を図っている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	急変時または、必要に応じ、特養の看護師へ相談し、対応してもらっている。看護師は日々のケース記録や週1回の来訪にて利用者の状況把握に努めている。看護職と介護職は互いの気づきなど意見交換を行ったり、看護師からアドバイスをもらっている。また、内服薬の管理をもらっている。		

京都府 グループホーム風花

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には情報の提供を行い、入院中は家族や地域連携室とまめに連絡を取り、状況の把握や情報共有に努めている。また、退院時には家族の意向の確認や風花の受け入れ体制等を含め相談を行い、早期に退院できるよう努めている。退院時カンファレンスの参加、地域連携室と連絡を取り合い情報共有している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時には看取りに関する指針や終末期の対応についてなど、書類と共に説明し家族から意見や意向を聞き取っている。また、同意書等ももらっている。援助内容について家族と話す際、今後重度化された場合についてグループホームでできる対応についてや他の施設への検討等についても確認している。	「看取り介護に関する指針」をもとに家族に説明し、どこでどのように最期を迎えたいかを事前確認書で聞き取っている。本人等の希望と諸条件が合えば看取りは可能であるが、現在看取りの方はいない。過去にグループホーム内で1名の看取りをおこなったことがある。職員会議で看取りの資料を配り、YOUTUBE視聴も併用して研修をしている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	安全衛生委員会の勉強会やAED使用法動画などを通して、救急救命講習会の参加を通して、実践的な対応ができるようにしている。また、ユニット会議においても急変時の対応について話し合ったりしている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	日中、夜間想定避難訓練を年に1回ずつ実施している他、BCPIにおける訓練として、備蓄品の提供やグループホーム単体での垂直避難訓練を実施した。併設の特養との協力体制の元、災害時の避難についての協力体制は築けている。ただし、自治会等との連携・協同については今後の課題である。	年に2回、日中、夜間を想定して併設事業所と合同で避難訓練を実施している。8月に日中訓練を、6月には単体での訓練を実施している。また、3月にも合同で予定している。消防署の立ち合いはないが、地すべり地域に指定されているため垂直避難訓練をしている。消防署からAEDを借り、WEB研修も交え看護師の指示のもとに心肺蘇生の研修をしている。水消火器による実地訓練もおこなっている。職員に消火器の設置場所の周知を徹底し、防災のテストに出題し、管理者が採点とコメントをしている。各居室に避難時の1日分の荷物を準備している。備蓄は併設事業所の栄養士が管理している。	

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅳ. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	施設内での身体拘束や高齢者虐待等の勉強会の中で学びを深め、発生案件については実際に現場で聞かれている言葉かけや事例を通してグループワークを実施し、その中で対応の振り返りや検討などを行っている。勉強会で検討された対応方法については、勉強会に参加出来なかった職員にも周知を行うために、ユニット会議等にて勉強会で話し合われた内容を伝えている。	身体拘束防止や高齢者虐待防止の勉強会の中で、プライバシーと接遇の研修をおこなっている。職員全員に周知するように、勉強会の参加者はユニット会議で伝達研修をしている。入浴時には脱衣場のドアは開けず、職員は別の入り口から入るように心掛けている。居室は開放時に外から見えないように暖簾をかけている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	普段の会話の中から、利用者の要望を聴き取り、言葉かけの中でも利用者が日々の生活において自己決定してもらえるよう努めている。また、1～2ヶ月に1回の訪問販売時には、自身で好きな物を選んでいただけるように支援を行っている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	食事時間、消灯の時間は大まかには決まってはいるが、利用者一人一人の生活スタイルを尊重し、本人が過ごしたい場所で過ごしていただけるようお願いを職員との都合を押し付けたくないような支援を心掛けている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	毎月ヘアサロンの訪問がある。利用希望の有無の確認や利用の際には、利用者一人一人にお好みのヘアスタイルなど確認をしている。利用者は毛染やカットの時間を楽しんでいる。また、職員は毎朝整容(洗面、髪の毛を梳かす、化粧水等を塗る)や自分の着たい服を選んでもらえるよう支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	利用者一人ひとりの力に合わせ、食材の「皮むき」や「カット」をしてもらうなど、やりがいや楽しみを持って参加できるよう支援している。また、食事の箸の準備や片付け、食器洗いなども積極的に協力してくれている。	食事メニューは利用者と決めている。現在は全員普通食で、食材は地産地消を基本とし、他に利用者とカタログを見て配達を頼んだり、業務用スーパーの利用もしている。週3回朝はパン食にしている。行事食では、おせち、恵方巻、花見弁当などを楽しむ。忘年会の鍋料理や庭でのバーベキューでは、上質の肉とノンアルコールのビールなどで盛り上がった。誕生日には寿司のテイクアウトもある。畑で穫れた芋は焼き芋に、餅つきの餅は正月の雑煮に入れ季節を感じている。利用者は積極的に調理等に参加されている。	

京都府 グループホーム風花

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	毎月体重測定の実施。また食事量を記録し、各個人の残食も観察し必要な方については、代替え食品を提供する等の個々に応じた提供に努めている。水分量については、記録してはいないが、どのくらい飲まれているかを日々職員間で伝達し、脱水にならないようにこまめな水分提供をしている。また、ユニット会議には特養の管理栄養士も参加し、食事等についての意見をもらっている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	食後の歯磨き、義歯の洗浄などの声かけを行い、また支援が必要な利用者には付き添い、口腔内の清潔が保てるよう努めている。また、義歯は週2回洗浄剤を使用し、清潔の保持に努めている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	一人ひとりに応じたパッド選びと、排尿・排便間隔の把握に努め、個々に応じた声かけやトイレへお誘いするなど、トイレでの排泄を実施している。紙パンツ→布パンツに変更になられた方もいる。	9名中8名が布パンツで、1名が紙パンツで過ごされている。自立の2名以外、大半が入所後紙パンツから布パンツに移行されている。職員はさりげなくトイレ誘導やパット交換の声掛けや支援をしている。夜間も紙パンツに頼らず日中と同じ排泄用品を使用されている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便の状態を観察し、必要な方には看護師と相談し服薬調整を行っている。また、薬剤に頼るのみでなくオリゴ糖の摂取や運動量も増やしたり、水分摂取量にも注意している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴は基本週2回を目安とし、朝の9時～夕方17時までの間で大まかに入られる方は決まっているものの、本人の思いをお聞きし、できる限り、利用者の入浴希望の時間帯等に沿えるように努めている。希望があれば、週3回も対応している。	基本は週2回の入浴で、3回だった方も「しんどい」と言われ、今は入浴2回と足浴をされている。大きめのお風呂に浸かり、職員とゆっくり会話している。入浴時間は本人の選択を尊重している。前日に利用者と用意した着替えを脱衣室に置いている。職員から頂いた柚子で柚子風呂をすることもある。現在入浴拒否の方はおられない。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	概ねの消灯時間は決まっているが、基本的に利用者の個々の思い思いの時間を過ごしている。また、居室内にて快適に過ごせるよう、職員が訪室し利用者の希望を聞き、窓を開けたり、エアコンで室温調整等を行っている。		

京都府 グループホーム風花

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬剤情報書を管理し、変更等があった場合、記録に残し職員と看護師で情報を共有し利用者の様子観察をしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	日常生活の関わりの中から、利用者の楽しみや得意なことを尋ねるなど、利用者の持っている能力の把握に努めている。そして、得意な事や好きな事に取り組めるよう環境作りを行っている。大正琴をされる方や、編み物をされる方、絵を描かれる方などがおられる。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	施設の敷地内であるが、毎日夕刊を特養の玄関まで取りに行かれるなど散歩を楽しまれている。また、職員の人員などの都合はあるものの可能な範囲内で外出の支援を行っている。家族の協力の元、ご自宅でゆっくり過ごされた方もおられた。	現在は職員配置の関係で全員での外出は難しくなっているが、事業所の買い物に同行してもらったり、受診の帰りにソフトクリームを食べに寄ったりしている。又自宅に帰られる方もある。牧駅や五十鈴荘(特別養護老人ホーム)の花見、与謝野町の親水公園、大江町のオノ神の藤公園などに行っている。職員宅の芋ほりにも行っている。毎月の移動販売車や移動図書館を覗く楽しみもある。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	個人でお金を所持されている方が1名おられるが、使われていることはない。しかし、訪問販売や外出時に使う機会はある。外出時に買い物へ行かれた時には、施設の立替金を入れた財布をお渡しし、支払いをしていただく場面を作った。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	携帯を持参されている利用者もおられる。自由に電話や手紙が書けるような環境作りに努めており、家族に手作りの絵手紙を送られた方もおられる。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共有空間については、清潔感が保てるよう、整理整頓に努めている。季節に応じた作品作りを行ったり、会話を通して季節感を感じてもらっている。そして、職員や利用者同士の会話を楽しめる和やかな雰囲気作りに努めている。	広いリビングダイニングにはテーブルが3卓置かれ、続きの間は畳敷きで、本棚やソファ、テレビが置かれている。しかし、利用者は庭の見える廊下のつきあたりの談話室に集まることを好まれる。リビングや廊下の壁には、塗り絵、貼り絵、習字、額入りの絵画などの利用者作品が飾られている。花や野菜づくりのボランティアのおかげで屋外の美化も進み、談話室からの景観もよい。掃除は職員と利用者としてしている。利用者はボーッと過ごすことがなく、自分の出来ることを考えて行動されている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	穏やかに過ごしていただけるよう、一人ひとりを観察し、利用者の意見も考慮しながら隣同士で会話が弾むような席順を考え決めている。談話室での読書や利用者同士での会話であったり、居室にテレビを設置するなど、個々の時間作りと居場所づくりを行っている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居時には、家で使っておられた馴染みの物を持参してもらい、利用者と家族と一緒に考え配置している。また、家族との写真や誕生日会の時にお渡しする職員からの手作り色紙を飾ったり、ご自身で作られたお好みのパズルや、家族が描かれた絵などを飾っておられる方もいる。居室が殺風景にならない様に本人の希望を聞きながら居心地の良い空間となるよう努めている。	入り口には重厚な木製の表札と長のれんがかかっている。居室は洋・和室の二間続きで、障子で仕切られている。洋間には鏡付きの洗面台があり、化粧品、歯ブラシなどを置いている。大方は奥の和室にベッドを置かれているが、洋間側にベッドを置き、和室に炬燵を置いている方もある。寝具類やテーブル、椅子などを家から持って来られ、壁に面会時の家族写真、本人が完成させたパズルなどを飾っておられる。居室で終日絵を描いている方もおられる。それぞれの部屋に本人らしさや生活感が息づいている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	居室の入り口に表札を掲げ、トイレ戸には「トイレ」トイレ内の電気スイッチには「電気」と分かるように紙を貼っている。また、夜間には足元灯を点灯するようにして、安全に移動できるように配慮している。		